

11月18日(金)のアイデア発表会では、熊本市立白山小学校の深川佳織先生による「話したい！対話で深める読みの授業アイデア」、そして芦北町立志岐小学校の金子直美先生による「子どもが見通しを持ち、生き生きと学び進める単元づくりのアイデア」の2つの発表がありました。

【白山小学校 深川先生のご実践から学ぶ】

深川先生は、対話の基礎作りとして、「教室掲示」「フリートーク」のご提案をされました。

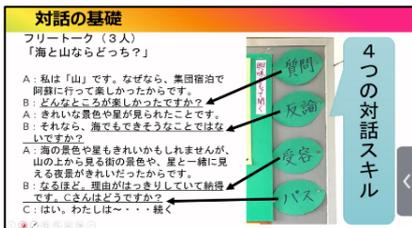
① 教室掲示

対話の基礎は、「上手な話し手、聞き手を育てること」と捉え、学年に応じた教室掲示を行います。例えば低学年では、「あ」いての顔を見て、「い」っしょを見つけて・・・など、聞き方・話し方名人の例を掲示します。中学年では、「つなぐ言葉」「反応する言葉」と、より深い対話につながる掲示にレベルアップしていきます。これらの言葉は、教師が提示するばかりではなく、子どもが用いたよい言葉も取り上げ、右上写真のように、掲示をブラッシュアップしていきます。「理由」「理由付け」「根拠」の3観点でもまとめられており、とても活用しやすそうです。



② フリートーク

「海と山とどっちが好き」など、テーマを決めて、ペアや三人組で話し合いの場を設けます。聞き手は、「質問」「反論」「受容」「パス」という役割を持ち、下の写真のように、話し手に反応していきます。このような4つのスキルがあると、対話により「つながり」が生まれそうですね。また、これらの対話を「筆談」する場も設けられました。話し言葉は流れてしまいがちですが、文字に残すことで対話への自覚も持て、聞き手を育てることにもつながると学ばせていただきました。



このように、対話の基礎を「教室掲示」や「フリートーク」で築いていくことが、その後の授業に生きていきます。深川先生は、授業の中で、意見のずれを生じさせ、そこから対話を生み出す実践を積み重ねられています。対話の基礎が大切と、改めて感じさせていただきました。

【志岐小学校 金子先生のご実践から学ぶ】

金子先生は、説明文「じどうしゃくらべ」から、単元づくりのアイデアをご提案されました。

① ゴールの明確化と「わたしのめあて」

この単元の後半には、自分の調べた自動車の説明をするというゴールがあります。また、単元全体として、「事柄の順序」をおさえることもねらっていきたいところです。

金子先生は、子どもが必然性を持って活動に取り組めるよう、「タブレットン (Eテレのキャラクター) になろう」と単元を方向付けます。タブレットンになりきることで、「順序を分かりやすく説明したい」「問いの答えを見つけたい」という、「わたしのめあて」が明確化します。このようにめあてを明確化することで、説明文を読む必然性が生まれ、順序やつなぎ言葉に着目しながら読み進めていけると学ばせていただきました。



② アウトプットの時間

金子先生は、授業後半で毎回アウトプットの時間を設けられています。ここでも、「タブレットン」になりきって、左写真のようにペアで説明し合う活動を設けます。このようなアウトプットがあることで、「しごと」「つくり」という項目や順序をおさえたり、「そのために」といったつなぐ言葉を意識して使ったりする力が高まります。このような蓄積は、単元後半の説明する学習活動に直接的につながります。読む学習においても、アウトプットの場面は細やかに設けることが大切と実感しました。



★お二方の実践から、対話を生み出す土台作り、学習課題設定のよりよい工夫を学びました。深川先生、金子先生、ありがとうございました。